

**J** **apanese text**

2017年 秋/冬号 日本語編

**Works**

**不二**

画・文=篠田桃紅

p.003

午前五時、ある匂やかなものが、独り立っている私に、届く。すぐそこにある大きな山、視界いっぱいの大きな山全体が、真紅にかがやく一瞬。

その、ホンの一瞬は、私を太古のヒトに戻らせる。

天と地のあいだに、ぼう大な、まっ赤なうつくしいかたちのものがあらわれるとき。

その真紅の山は一瞬、一瞬に変わり、それは、にんげんの息づきよりも微細な時間を刻む。

生きものを超えたいきもの、が、この山、と、人が感ずる瞬間。

強さ、優しさ、儂さ、充実、縁、無縁、色、無色、光、闇、形、無形、火、氷。

一切があり、一切が無である。この世でないこの世の存在を、一瞬感じる機のおとずれ、

これこそわが生の秘処、と、われにもあらぬ、私が感じるトキ。

“恍惚と不安と二つ我にあり”。※

誰かの言葉が、ふと、この言葉に、ふさわしくもない私の心が覚えていたことに気づいて慌て、

一瞬とはいえ、我が思い上がりを恥じ、

この、あめがしたのうつくしき山のもとに立っているのである。

私は今この山のこの瞬間に居合わせたということで、

限りなくごうまんに、限りなくけんきよになっていることを感じる。

※ 19世紀フランスの詩人ポール・ヴェルレーヌの詩の一節

**口絵**

**冬の青森——雪と氷の絶景を求めて**

撮影=小野祐次 文=編集部

p.006

深く青い冬空を映すドラマティックな湖、猛々しく滝が流れ落ちる瞬間をとどめた氷瀑、厳しい風雪が生み出すアートのような樹氷。この地を旅する人は誰もがこの絶景に息を呑む。そしてこんなにも厳しい冬とぶつかり合って生きてきた人々への、畏敬の念に強く打たれる。——ここは本州の最北端に位置する青森県。心震わせる冬が今年も始まろうとしている。

(p.007)

**澄み渡る十和田湖の輝き**

最大水深 326.8 m、日本で3番目に深い十和田湖は、真冬でも全面凍結することは稀。だからこそ厳しい冬の瞬の晴れ間、その湖面は青空を映して冴え冴えとした煌めきを放つ。天候にもよるが、真冬の時期でも車で湖畔まで行くことができ、さらに少し登って発荷峠から深く青い湖を見渡すこともできる。秋田県との県境に位置するこの湖は、火山活動によって誕生した二重式カルデラ湖で、その周囲を 600 ~ 1000 m級の外輪山と森に囲まれている。火山活動の始まりは 20 万年前といわれているが、4 万 ~ 1 万 3000 年前に起こった 6 回にわたる大規模な噴火によって中央部が陥没。現在の原型となった。最近では西暦 915 年に大噴火を起こし、その際には半径 20 キロ圏内が焼け野原となり、直線距離にして約 800 キロ南に離れた京都にまでその火山灰が届いたと伝えられている。

(p.008)

**青白く凍てつく奥入瀬溪流**

上：全長約 14 キロにわたり、そのほとんどが国立公園の特別保護区となっている奥入瀬溪流は、約 1 万 5000 年前に十和田湖が決壊したときにできたもの。千変万化の流れに点在する大小さまざまな無数の滝は、冬本番ともなると見事な氷瀑となり、訪れるものを荘厳な世界へと誘うのだ。冬でも車でアクセスでき、静かな溪流のせせらぎに沿って、次々と現れる青白く聳え立つ氷の芸術を歩いて巡ることもできる。冷たい空気を時おり震わせる、冬が求愛の季節だというカワガラスの愛らしい鳴き声や、溪流沿いに群生する繊細なブナの枝が描き出すモノクロームの陰影もまた、青森の忘れられないワンシーンに刻まれることだろう。

(p.009)

### 熱い魂がこもった青森の祭り

左:冬の青森を巡ると、土地土地での祭りのバリエーションの多さに驚く。アーティスティックな雪像、雪燈籠に火を灯したロマンティックな景色、湯気を上げる料理の数々が並ぶ賑やかな屋台に冬の夜空に打ち上がる花火。寒さを吹き飛ばすような陽気な祭りがある一方、来る春の豊穡を、平和を、復興を祈る、荘厳な祭りも多い。いくつもの冬を乗り越え、そして東日本大震災を経てきた青森の人々の熱く、強い思い。それを感じるためだけにでも、青森の冬の祭りを訪れる価値がある。

右:唸るような風に雪があおられる地吹雪で知られる津軽地方の五所川原。厳しい寒さの中、来る夏に向けて肅々と立佞武多を作る人々がいる。立佞武多とは木組みに和紙を貼った高さ23mもの勇壮で巨大な山車で、さまざまな伝説のワンシーンが立体的に表現されている。雪に煙る景色と対を成す彩り鮮やかな佞武多の向こうから、熱く盛り上がるお囃子の音色が聞こえてくるようだ。

(立佞武多の館 [www.tachineputa.jp](http://www.tachineputa.jp))

そこから車で向かえばいい。青森は今日も変わらぬ姿で、旅人たちを迎えてくれることだろう。

### 厳しい風雪が生むスノーモンスター

とわだほちまんたい  
十和田八幡平国立公園八甲田は、手付かずの広葉樹林と針葉樹林が悠然と広がる美しい山々が連なるエリア。山頂付近の平均気温が-10~-15℃となる頃、八甲田には雪が生み出した樹氷群、スノーモンスターたちが現れる。これはアオモリドマツに強風によって叩きつけられた雪と氷が、瞬時に凍ってできたもの。しかもこうしたスノーモンスターが林立する連峰の一つ、たもやち  
田茂滝岳山頂からは、3.5~6.3キロに及ぶ数本のスキーコースやツアールートが用意されているのだ。樹氷の中を滑走する快感は、一度体験すると忘れられなくなるという。毎年11月下旬の初滑りから5月中旬の春スキーまで、八甲田を訪れるスキーヤーやスノーボーダーは途切れることがない。

## p.010

本州の最北端に位置する青森県。津軽海峡を挟んで向こう側は北海道、さらに両サイドには太平洋と日本海があり、三方を海に囲まれている。中央には八甲田山を含む奥羽山脈が県内を二分し、それによって太平洋側と日本海側では気候が異なるのも特徴的だ。たとえば冬。日本海側からの湿った空気が奥羽山脈にぶつかって雪を降らせるため、日本海側は国内でも有数の豪雪地帯となる。一方、太平洋側はからりと乾燥した晴天が多いという。中央に位置する奥羽山脈は深い雪に覆われ、驚異の景観を生み出すのだ。

そう、自然が生み出す景観。それこそが青森県最大の魅力といえるだろう。人の手が入っていない、天然のままの美しさ。おそらくは何十年、何百年前にこの地に暮らした人々も同じ雪景色を見ていただろうという、時を超えた感動。

青森県の人々は、この地のありのままの姿を守りながら、しかしその場所へのアクセスができるように道を整備した。十和田湖、奥入瀬溪流、五所川原に八甲田—もしあなたがこの絶景を見たいと願うのであれば、それは難しいことではない。青森には青森空港と三沢空港という二つの空港があり、さらに東北新幹線も乗り入れている。目指す場所へは